

地域密着型小規模施設における認知症高齢者の環境づくり —地域ケア環境・地域環境に関する考察を通して

濱崎 裕子

Environmental Design for Community-based Facilities for People with Dementia —Through an Investigation of Community Care and Regional Environments

Yuko HAMASAKI

【要約】 認知症高齢者を対象とした高齢者施設整備に関しては、PEAP（認知症高齢者への環境支援指針）日本版3に基づく環境改善が、主に都市部の特別養護老人ホーム等で実践されるようになった。本研究はPEAPを基盤とした地域密着型小規模施設対応型マニュアルを開発することを目的とする一連の研究のなかで、地域ケア環境・地域環境に関する調査および考察を通して、既存のPEAPにどのような視点を付加していくべきかを論究したものである。結論として、「慣習」「信仰・宗教」「自然環境」への視点を強化し環境づくりに活かしていくことが提案された。

【キーワード】 地域環境, 地域密着型小規模施設, PEAP日本版3, 認知症高齢者

1. 研究の背景

認知症高齢者が環境変化に影響されやすいことは、トランスファーショックやリロケーションダメージという用語に代表されるように、ケア環境を論じるときには周知のこととなっている¹⁾。認知症高齢者と環境との関係性に関する研究は、日本建築学会の人間—環境系研究²⁾の流れのなかで、高齢者数の増加に対応する施設整備に関する検討を通して行われてきた。Cohen, U. and Weisman, G.D. (1991) の“Holding On to Home”³⁾が1995年に『老人性痴呆症のための環境デザイン』⁴⁾として紹介されて以降、その中に示された認知症の人への関わりを環境の3つの側面（物理的・社会的・運営的）との相互作用として捉える概念図⁵⁾が、この分野の研究フレームのベースとなってきた。

さらにWeisman, G.D., Lawton, M.P. (1996) らによる“The Professional Environmental Assessment Protocol”⁶⁾がPEAP日本版3

『痴呆性高齢者への環境支援のための指針』⁷⁾として、施設環境づくりの基本方針となってホームページ⁸⁾に掲載されて以降、多くの福祉現場職員にも入手しやすいものとなり、研修会などでも紹介されるようになった。

一方で、認知症高齢者数に関しては2025年には約320万人になると推計されている⁹⁾。これに対応するためにベビーブーマーが65歳以上になる2015年を見据えた高齢者介護の基本指針は「尊厳を支えるケアの確立」とされ、特に認知症高齢者への対応を柱とする姿勢が厚生労働省から打ち出された¹⁰⁾。

また2005年に改正された介護保険法において、予防重視型システムの確立などとともに新たなサービス体系の確立が図られることになり、そのなかで地域密着型サービスの創設が規定された。これは今後、超高齢社会を迎え、認知症高齢者や一人暮らし高齢者の増加が見込まれるなかで、高齢者が身近な地域での生活が継続できるようにするためのサービスである。介護給付型の6種類のなかには認知症対応型共同生活介護（グループホーム）

や新設の小規模多機能型居宅介護が含まれている。これらの事業所数の推移をみると、2006年から2009年までの事業所数の増加が著しいのは小規模多機能型居宅介護で18から1,936になり、グループホームは8,210から9,712に増加している¹¹⁾。

本論文が対象とする地域密着型小規模施設とは、主にグループホームと小規模多機能型居宅介護施設である。

2. 研究の動機と目的

前述したように「2015年の高齢者介護」のなかで施設環境の重要性に目が向けられるようになり、2003年から新設施設では個室・ユニットケアが制度化された。これは宅老所のような地域の中の小規模施設における認知症ケアの質の高さが認識されたことにも大きく影響を受けたものであり、それまでの医療モデルから生活モデルへの転換という基本方針を制度化したものである。しかし、ユニットケアの導入に当たっては大規模処遇に慣れているスタッフや施設運営者にとって、現実には多様な課題を抱えている¹²⁾。そこで、ユニット型施設環境を上手く活用することにより認知症高齢者に必要な個別ケアを実現するための方策の一つとしてPEAPが活用されるようになった。2002年頃から東京を中心として主に都市部における大規模施設で実践研究が行われ、その成果が報告されてきた¹³⁾。

この実践を全国に広めるべく、筆者ら¹⁴⁾は九州で初めて熊本の職員研修を通して取り組み始めたが、参加者のなかに地域密着型小規模施設の職員が多く、大規模施設を想定したプログラムをそのまま活用することがスムーズには行かなかった。

この原因について、認知症高齢者に対応するケアと環境のコラボレーション¹⁵⁾の視点から考察したところ、以下の3点が指摘できる。

- 1) PEAPの進め方である6ステップ¹⁶⁾を踏む環境づくりでは、「場所」(物理的環境)からスタートするが、グループホームなどの職員は「人」(社会的・ケア的環境)からのアプローチを常としている。(本稿の図1参照)
 - 2) 地域密着型小規模施設では、ケア環境は大規模施設のように建物内に納まるものではなく、立地している地域の自然環境や地域資源、周辺住民までも含むものであり、認知症の人にとってはそれらの環境影響が軽視できない。
 - 3) PEAPでは、環境評価をする際にキャプション評価(施設環境の気になるところを写真に撮ってそれらをもとに評価分類する)という方法を用いるが、認知症の人にとって大切な感覚刺激(においや音など)が写真からは捉えられず、環境づくりへ反映されにくい。
- そこで筆者は、地域密着型小規模施設対応型の環境づくりマニュアルを開発することを目的に研究プロジェクトに取り組み始めた。具体的には以下の4項目の作業を計画した。
- 1) 熊本県¹⁷⁾の各小規模多機能型居宅介護施設やグループホームが、これまで実践してきた環境づくり(工夫)を建物環境ばかりでなく地域社会との相互交流も含めて調査する。方法としては県に登録している認知症対応型施設を対象にアンケート調査を行い、結果を集計・分析し、これらの施設特性を反映している要素を抽出する。アンケート回答者のなかで環境づくりへの関心が高く、同意を得た事例については、後日訪問による建物調査とヒヤリングを行う。
 - 2) PEAPの8次元¹⁸⁾のそれぞれに地域ケア環境・地域環境を当てはめてみて、それらとの関係性を整理する。方法としては、職員研修の日に研究目的に沿ったテーマでワークショップを行う。そのなかで各事業所が行っている地域社会との交流や地域環境の要素について考察する。

- 3) PEAPの6ステップのなかの生活シミュレーションを個別に行うことから始めて、ステップの順番を入れ替えると同時に簡略化を図り、「人」からのスタートによる小規模施設での環境づくりに適応させる。ひもときシート¹⁹⁾の活用とも関連させる。
- 4) 虚弱や認知症がありながらも在宅生活を続けている高齢者の在宅環境のどのような要素が自立支援につながっているかを考察する。

2011年末までに、1)のアンケート調査と2)のワークショップを終えているが、アンケート分析に関する報告は別稿で論じることとし、本稿においては2)の考察結果を論述する。

したがって、本研究の位置づけおよび目的は、「地域密着型小規模施設対応型マニュアルを開発する」という総体的研究の一部分となる「認知症高齢者施設的环境づくりについて地域ケア環境・地域環境をテーマにした職員ワークショップを通して実態調査を行い、その考察に基づいてマニュアルに向けての提案を行う」ことである。

3. 研究の意義

これらの一連の研究は、前述したように国の方針に従って全国各地で普及しつつある地域密着型小規模多機能施設の今後の環境づくりにも貢献すると考える。

また認知症高齢者の地域ケア環境や地域環境に焦点を当てた研究としては、菅野らによるもの²⁰⁾や敵の調査研究²¹⁾、またグループホーム入居者の外出行動などからユニット外空間との関わりを考察したもの²²⁾があるが、入居者本人にとっての環境の概念を大きな枠組みで捉えなおすというアプローチのものはない。

本研究が、認知症高齢者にとって特に重要である「生活の継続性」を視野に、環境を新たな枠組みで捉えることの論拠を提示できれ

ば、地域環境への配慮を再考することおよび地域福祉の視点から地域ケア環境づくりにも視野を広げるという点で、新たな知見を与えるものと考えている。

4. 地域ケア環境・地域環境への取組みの実態

1) 地域環境の位置づけ

既存のPEAP日本版3のなかにも地域や周辺環境への視点が含まれてはいたが、特別養護老人ホームのような大規模施設では24時間365日の生活がその建物内で完結できるために、どうしてもそれらが環境づくりに反映されにくい現状がある。また、専門職の揃っている施設であるために周辺地域住民の支援（地域ケア）を受けなくても利用者の援助は可能である。そのような現状把握のうえで、小規模施設に対応するための指針づくりを検討する際に、この地域ケア環境および地域環境を既存フレームの物理的、社会的、運営的環境とどのように関係づけるかということが議論される。

そこで、具体的に小規模施設が地域とどのような関わりをもっているかという視点でPEAPの8次元に該当するものの例を挙げてみると以下のようなことが想定される。

「見当識の支援」では、施設から見える高い山や灯台などのランドマーク。「機能的な能力の支援」では、畑仕事や散歩。「刺激の質と調整」では、四季の変化や日々の気候（雨、雪、風）。「安全と安心への支援」では、近所の人の見守りや交番・消防との連絡。「生活の継続性」では、農業など生業の延長上にある行為；漬物づくり、干物づくりなど。「自己選択への支援」では、多様な地域資源（公民館や神社）の存在。「ふれあいの促進」では、祭りなどの伝統行事への参加が想定できる。しかし「プライバシーの確保」に関しては、地域での施設のあり方に関連してくるため一様には想定しにくい。

このような見地に立てば、図1に示すよう

《基本》 《地域密着型小規模施設》

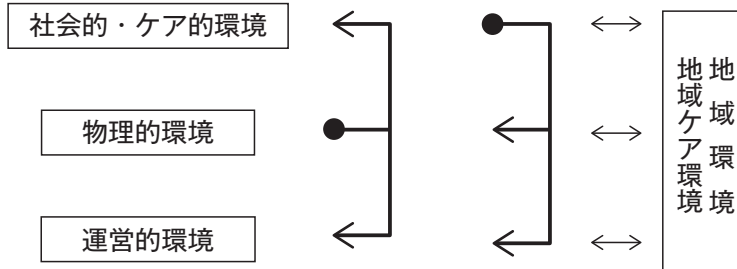


図1 地域ケア環境・地域環境の位置づけ

* 図中の●は、PEAPの基本が物理的環境評価から始まるのに対して、地域密着型小規模施設では、社会的・ケア的環境評価から始まることを示している。

に、地域ケア環境および地域環境は3つの全ての環境側面に関連してくる。

そこで、PEAPの8次元の各次元に地域環境・地域ケア環境のどのような要素が実際に該当するかを見出すための調査を行った。

2) 調査概要

- ① 調査日時；2011年7月28日
15：00～17：00
- ② 調査場所；熊本県交流会館（日本認知症グループホーム協会熊本県支部研修会）
- ③ 調査対象；熊本県下のグループホーム現場職員 参加人数60人
- ④ 調査方法；1グループ7～9人で8グループに分かれてワークショップ形式で意見を出し合うことにより、各事業所での地域との関わりの実態を検出する。各テーブルで大判紙に書かれた8次元のコーナーに自分達のグループホームで行っている活動についてポストイットに書いたものを貼っていく。→各活動について報告と意見交換をする。→地域

環境をグループホームケアに活かすための提案を3つ、各グループでまとめる。

3) 調査結果

PEAP日本版3は、認知症高齢者への環境支援に重要な8つの次元と具体的な内容を示す31の中項目より構成されている。これは前述したように施設環境を総合的に評価するものであるが、本調査において地域ケア環境・地域環境に焦点を当てて8つの各次元に該当するものを質問した場合に、具体的に得られた回答結果を表1に示す。

1列目が8次元の内容、2列目が概念と中項目の説明、3列目が今回の調査結果である。

ポストイットへの書き込みの中には建物内での活動に関するものもあったが、それは削除して地域との関わりのものであるものだけを取り上げた。（次頁 表1）

5. 調査結果分析

1) 量的分析

ポストイットに書かれた項目数をカウントすることにより、8次元のなかで、どの次元のものが多く実践されているかを比較検討する。

表1 PEAPの8次元の概念と中項目および地域ケア環境・地域環境との関連

()内の数字は回答数

次元	概念と中項目	地域ケア環境・地域環境に関する調査結果
① 見当識への支援	環境の物理的・社会的・時間的次元の効果が、利用者の見当識を最大限に引き出すような環境支援。「環境における情報の活用」「時間・空間認知に対する支援」「空間や居場所のわかりやすさ」「視界の確保」	【窓から見える風景】金峰山が見える(2)、阿蘇五岳、窓から見える高い山々、田んぼ、田園風景【交通】菊池電車で散策、看板、地区の名前が書いてあるバス停標識【自宅】自宅訪問、自宅の庭で過ごす、【ランドマーク】ガスタンク【自然資源】水源、公園の木々の移り変わり【地域資源】鬼子母神参り
② 機能的な能力への支援	日常生活動作(移動、整容、排泄など)への援助において、入居者の日常生活上の自立活動を支え、さらに継続していくための環境支援。「セルフケアにおいて、入居者の自立能力を高めるための支援」「食事が自立できるための支援」「調理、選択、買い物などの活動の支援」	【散歩】合志川に、公園、犬を連れて、近所、自宅まで、カフェ(21)【買物】馴染みの商店へ、近くのスーパーへ、食材の買い物、商店街(20)【畑仕事・野菜づくり】(20)【季節野菜】筍掘り、わらび狩り、高菜つみと漬込み【レク】家族とバラ園、ドライブ、近くの温泉へ【習慣】行商さんとの掛け合い、鯉のえさやり、温泉水を汲みにいく、通院、図書館へ本を借りに、有線電話の活用
③ 環境における刺激の質と調整	入居者の適応や感性に望ましい刺激、ストレスにならない刺激の質や調整、環境における刺激の質と環境における刺激の調整に分けてとらえる。「意味のある良質な音の提供」「香りによる感性への働きかけ」「柔らかな素材の提供」「適切な視覚的刺激的提供」	【花見】桜・つつじ・菖蒲(11)【ドライブ】(6)【動物等】ウサギ・ニワトリ・犬を飼う、蟬・カエル(2)・鳥の鳴き声、ほたる生息地【レク】そうめん流し、片岡演劇道場へ観劇花火大会、カフェへお茶、散歩【土いじり】いもほり、花摘み、草むしり(2)、菜園収穫【自然】中庭に小川、夕日を見る、山々の気候、周りの自然に四季感、風鈴の音
④ 安全と安心への支援	入居者の安全を脅かすものを最小限にとどめるとともに、入居者はじめ、スタッフや家族の安心を最大限に高めるような環境支援。「入居者の見守りやすさ」「安全な日常生活の確保」	【避難訓練】地域住民・消防団と避難訓練(16)、AED取扱訓練【警察】地元警察に状況提供、交番へ写真、子ども110番と認知症応援団ののほり【法人内】緊急コール、一緒に防災訓練、見守り【近所への声かけ】一人暮らし高齢者の見守り・ふれあい、近所の人に声かけ、自治会集会へ参加、近隣商店街の協力
⑤ 生活の継続性への支援	個人が慣れ親しんだ環境と生活様式を①個人的なものの所有、②非施設的環境づくりの2つの側面からユニット内において実現するための支援。「慣れ親しんだライフスタイルの継続への支援」「その人らしさの表現」「家庭的な環境づくり」	【買い物】(6)【墓参り】(5)【仏壇の世話】通夜(3)【保存食作り】(7)梅干し、ラッキョウ、つるし柿、魚の干物、切り干し大根、梅酢、柏餅【家庭菜園】ベランダでトマト、ゴーヤのカーテン、園芸・水やり(5)【田畑】稲刈り・脱穀、茶摘み、草刈【地域活動】町内回覧板返し、地区清掃活動、バザー【レク】外出支援、花火、花見、ドライブ、散歩、七夕飾り見学【家事】布団干し、洗濯物干し
⑥ 自己選択への支援	物理的環境や施設方針によって入所者の自己選択が図られるような環境支援。「入居者への柔軟な対応」「空間や居場所の選択」「いすや多くの小物の存在」「居室での選択の余地」	【美容院】慣れ親しんだ美容院(5)【お参り】墓参り、お寺参り、自宅の仏様参り(2)【買い物】個別の衣類(5)、移動販売での買物、欲しいもののショッピング(3)【外出】好きな場所へ、ふるさと訪問、温泉、散歩、ドライブ【レク】誕生会(2)、図書館の本借り、レクの選択
⑦ プライバシーの確保	入居者のニーズに対応して、ひとりになったり他との交流が選択的に図られるような環境支援。「プライバシーに関する施設の方針」「居室におけるプライバシーの確保」「プライバシー確保の空間の選択」	1対1のドライブ 墓参り
⑧ ふれあいの促進	入居者の社会的接触と相互作用を促進する環境支援と施設方針。「ふれあいを引き出す空間の提供」「ふれあいを促進する家具やその配置」「社会生活を支える」	【保育園児】交流(12)【小学生】(5)ゆとりの時間、鉢植え交流、お話、運動会見学(6)、子供会【中学生】(2)合唱コンサート参加、体験学習受け入れ【夏祭り】(18)参加、開催【祭り】(11)地藏祭り(2)、神社の大祭、笛田神社まつり、足手荒神祭り、秋祭り、温泉祭り、地元の祭り(4)、山笠見学、どんどや(3)【老人会】(6)【地域公民館】童謡教室、敬老会、クリスマス会、高齢者サロン(3)、三味線・舞踊、地域運動会(2)、地域座談会、食事会、演芸会、もちつき大会【福祉施設交流】イベント(6)、つどい(2)、デイへ参加【地域清掃】(2)、神社清掃、地域奉仕活動、公園清掃【お参り】神社、お寺【ボランティアとの交流】花壇手入れ(4)、実習生との交流、シルバーさんとの奉仕作業【家族会】、【広報】新聞を作り回覧、お手紙を配る【外食】おでかけ昼食【その他】ふれあいうオーク、野菜のおすそわけ

表2 次元別の回答項目数

	PEAPの8次元	回答数
1	見当識への支援	16
2	機能的な能力への支援	81
3	環境刺激の質と調整	41
4	安全と安心への支援	29
5	生活の継続性への支援	60
6	自己選択への支援	32
7	プライバシーの確保	2
8	ふれあいの促進	130

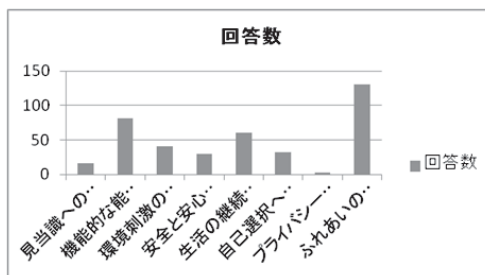


図2 次元別の回答項目数

(表2, 図2)

表2および図2に示すように、実践活動のなかで群を抜いて最も多いものは「ふれあいの促進」である。地域密着型の小規模施設の特徴を活かし、周辺地域住民との交流を積極的に行っていることが分かる。特に多いのは夏祭りや地元の祭りへの参加が多く、イベントを通してふれあう機会としては、祭りが高齢者にもっとも馴染みがある行事であり、そこに行けばグループホーム入居前の知人との再会の機会もあり、このふれあいが地域とのつながりを切らないで生活を継続することへの意義も大きい。また地域公民館での活動参加も多く、これらの地域自体がコミュニティとしてのつながりを持ち続けていることも窺える。そして保育園児や小学生との交流がさかんで、高齢者が小さい子どもとのふれあいで笑顔になり、活気を取り戻すことなどから多くの機会が設けられるのであろう。いずれにせよ、これらのふれあいがご近所づきあいの延長上にあるような様相であり、地域密着型施設の長所として評価できる。

次に多いのは「機能的な能力への支援」である。その内容としては、散歩と買物が多く、畑仕事を行っているところも多い。地域環境として散歩や畑仕事を行いやすいところに立地していることが大きく影響し、機能や体力を維持する支援として行われている。

3番目に多いのが「生活の継続性への支援」

であり、入居前の生活習慣を続けるという意味で買物や墓参りが挙げられており、野菜の収穫物から保存食を作ることも同様に多い。

回答数が非常に少ない「プライバシーの確保」に関しては、施設が地域との関わりをどのようにもつかという視点で考察すれば、現在の方針は利用者のプライバシーを確保することの逆方向に向いているとも言える。すなわち今日、地域に開かれた施設が求められており、各施設が情報開示することを通して地域との信頼を構築するという考えれば、利用者の状況に関してもプライバシーとして封じる方向で閉ざすよりもむしろ開放する傾向がある。したがって、この次元への回答が極端に少ないという結果になっている。

地域に関連する環境づくりについて8次元ごとの回答数を順位付けることに関し、先に行ったアンケートによる環境全般を対象とした実践度の結果と比較した。環境全般の次元別実践度でも「ふれあいの促進」は第2位で上位にあることが共通している。しかし「機能的な能力への支援」は第7位と低く、地域を対象とした場合の屋外活動が心身の機能的な能力の支援に貢献していることが分かる。地域密着型小規模施設では外出や地域交流が盛んであるという特性が、利用者にとっての生活環境づくりに重要であることが見出された。

これらのことから地域密着型施設の環境づ

くりの場合には、「環境」の枠を地域ケア環境・地域環境にも当初から確実に広げ、これらの環境を改めて見直し包括していくことが必要である。そのことが認知症高齢者の日常生活をトータルに支援することになり、本人にとっての生活の質を高めるケアにつながると考えられる。

2) 内容的分析

表1に示してあるPEAPの各次元の基本概念および中項目の内容と、今回の調査結果の地域ケア環境・地域環境に関する実践活動内容を比較して、特徴を抽出する。

- ① **見当識への支援**では、窓から見える風景、それも山の名前など固有名詞であげられていること、および環境における情報が地域の自然環境から得られていることが特徴である。これは自宅からグループホームに転居しても、遠くに見える見慣れた風景は同じであり、自分の住む地域として空間認知できることを示す。言い換えれば心象風景が見えることにより、認知症の人に安心をもたらす、見当識障害を緩和することにつながっている。
- ② **機能的な能力への支援**では、自立能力を高めるための支援が、PEAPの中項目ではセルフケアのなかで行われるのに対し、地方の小規模施設では散歩、買物、畑仕事などの屋外活動を通して身体を動かし続けることにより行われている。特に笥掘りなどの技術を伴うもの、あるいは行商との掛け合いによるコミュニケーション能力の保持などを事例としてあげていることが特徴的である。
- ③ **環境における刺激の質と調整**では、ほとんどが自然環境の活用を通して行われている。それが五感を刺激するものとして最も効果的であるためと考えられる。特に農山村では心地よい自然環境に恵まれており、四季の花や気候変化だけでなく、鶏、蝉やカエルの鳴き声、また川などの水辺空間等、

質のよい刺激や感性に働きかけるものがある。したがってPEAPの概念では環境刺激を調整することが挙げられているが、その必要は少ない。

- ④ **安全と安心への支援**では、特にグループホーム火災以降、行政指導があったことも影響し、避難訓練に力を入れている。それも地域住民や消防団と一緒にいるところに地域密着型小規模施設としての特徴がある。一方で、一人暮らしの人や近所の高齢者に声かけをすることも行っており、サービスの対象を施設入居者だけではなく、地域に向けて広げているところも注目される。
- ⑤ **生活の継続性への支援**では、PEAPの中項目の中の「慣れ親しんだライフスタイルの継続への支援」に力が注がれている。すなわち生活環境を継続するために家庭的な環境づくりをすることよりもむしろ、日、月、季節の時間サイクルの中で継承されてきた生活行為を継続するための実践活動が多いことが特徴である。
- ⑥ **自己選択への支援**では、PEAPでは居場所や家具の選択に焦点が当てられているが、調査結果では行きつけの美容院へ行くこと、墓参りをすることや衣類の買物など、個別のニーズに応えるという意味での選択の支援を行っていることが注目される。
- ⑦ **プライバシーの確保**は、前述したように、最近では徘徊しがちな認知症高齢者の情報を提供して地域で共有し、地域に支援を求めようとする活動も多く、プライバシー確保とは逆の傾向である。しかし、事例として挙げられた1対1のドライブや墓参りは、本人にとってプライバシーが護られているという意識をもつことができ、個別支援につながる行為となっている。
- ⑧ **ふれあいの促進**では、地域住民と一緒にやって行う多彩な活動が実施されており、グループホームに入居後も地域の伝統行事や自治会活動に職員とともに参加している

様子がうかがえる。職員が比較的近い地域の出身者が多く、文化を共有しやすいこともこれらの活動を促進している。地方では、盆踊り、どんどや、地域清掃、町内運動会などのコミュニティ活動が現在も継続されており、PEAPの中項目の「社会生活を支える」という支援が行われやすい環境であることが特徴である。また、「ふれあいを引き出す空間」が地域社会そのものであると捉えることもでき、これらは地域密着型施設の特性にとって重要な要素である。

3) 地域ケア環境・地域環境をグループホームケアに活かすための提案

ワークショップにおいて、各施設で行っている活動の実態報告の後に、「今後、地域ケア環境・地域環境をグループホームケアに活かすためにはどのようなことが提案できるか」を各グループで話し合い、3項目にまとめて発表した。

結果を考察すると似通った提案が多かったが、最も強調されたのは「自分達からもっと地域に出向いて行って顔見知りの関係を作っていく」ことであった。また地域行事に参加することも共通していた。地域ケア環境をよくしていくには、施設職員側の積極性が求められているという認識が強いと言える。そして、方法として認知症サポーター養成講座の開催や地域運営推進会議の充実により住民の理解を深めることや、地域の相談窓口を設けてサービスを提供することなども挙げられていた。

6. 総合的考察

前節の分析を総合的に考察すると、今回の調査結果から得られたものとして、今後の地域密着型小規模施設の環境づくりに必要な視点は「慣習」「信仰・宗教」「自然環境」の3つのキーワードに代表される。考察に当たっては、調査研究の動機すなわち地方のグルー

プホームなどの環境づくりにおいて、既存のPEAPがそのままでは適用しにくいという認識が前提にある。そして、地方の地域密着型小規模施設の環境づくりに適用するにはどのような視点が必要であるかということから検討したものである。

1) 慣習

認知症高齢者ケアにとって「生活の継続性」がキーワードとなっている。施設入居のときに使い慣れた家具を持ち込んで自宅と同じような環境づくりをすることが推奨されることも具体的な方法の一つである。しかし、今回の調査では認知症高齢者にとって大きな意味をもつ継続性とは、日常生活の表には見えない部分にある「慣習」を支える環境づくりにあるという見解が得られた。この慣習について、宮本常一の制度と慣習を区別する必要性を説いた論述を引用する²³⁾。

「制度と慣習は違う。制度でものごとが動いているように学校では教わった。しかし人間は制度にふりまわされて生きているわけじゃない。慣習が行動の基礎となっている。今一度、そのことをふりかえり、我々の生活を見直してみる必要があるのではないか。制度とは条文化され、慣習とはそういう条文をもたないでお互いの約束ごとの中で生きていくもので、民衆の日常生活の行動を規定しているものである。慣習による社会というものは本来制度的なものではなく、制度と慣習との食い違いが多くの問題をもたらし、制度だけを頼りに論を進めていくと現実とのギャップが生じる一つの原因となるのである」

このことは、中央省庁が定めた福祉制度が地方の現場で不適合をおこしている原因としても援用でき、また本研究の地方における地域密着型小規模施設の環境づくりに「慣習」への視点を改めて見直す提案の論拠となる。特に認知症高齢者を念頭においた場合には、エンゲルの「福祉というのは日常生活要求の充足努力である」という定義²⁴⁾が有用であ

る。また、「われわれの存在の確かさは過去から続く現在のように、未来もまた本質的に変わることのないという予測のうえに立っている。その予測はわれわれに『安心感』をもたらすとともに、自分固有の生活が侵されることもなく続いていくという『アイデンティティ』の強力な拠り所となる」と述べている。高齢者にとってのアイデンティティの根底に「慣習」があると言ってもよい。

2) 信仰・宗教

前項の「慣習」の具体的なものとしては、毎月一日に神社にお参りすることや、墓参り、仏様の世話などがあるが、今回の調査結果全体を通して、高齢者の生活を支える重要な要素として信仰あるいは宗教というものをより強く意識して環境づくりを検討すべきであるという見解が得られた。それは死を意識する高齢者や健康不安や孤独感のなかで生活する者にとっての生きていくうえでの精神的支えとなっている。

近代化のなかで人々が失ってきた信仰や宗教への視点を再考することに関し、河合隼雄の医療と宗教との関係についての論述を引用する²⁵⁾。「人は『死について』研究するのではなく、『私の死』を意味あるものにしないでならない。自分にとっての世界を考えると、それを何らかの超越的存在との関係において考えようとするそれは宗教になる」また、「近代医学の手法によるのみでは手の届かない医療の領域において、いわゆる『宗教』が威力を揮う」²⁶⁾とも述べている。

調査結果によれば、「ふれあいの促進」のなかで「祭り」が大きな要素を占めていたが、神事にまつわることに参加意欲が強く、「生活の継続性」のなかでも先祖を大事にする習慣が重視されている。また、地域資源のなかでは神社や寺の存在が大きな位置を占め、地域住民の結束力を高めるコミュニティの核機能を果たしている。人々は祈ることや信仰・宗教に基づく習慣を継続することにより、日々の生活の精神的安定と活力を得ている。

地域密着型小規模施設では、入居者がその土地（地方）の人である場合が多く、周辺住民とともに信仰や宗教により癒される機会や場所が存在し、それらをより活かした環境づくりを行っていくことが望まれる。

3) 自然環境

今回の調査対象である熊本県は緑豊かな山間部、農村部および臨海地域があり、それぞれに豊かな自然環境をもっている。したがって、調査結果から、同じ県下でも自然環境の違いにより、その立地特性に応じた実に多様な地域環境の活用事例が考察でき、そのことは地域密着型施設の環境づくりにおいては、立地および自然環境をより重要視した環境づくりが必要であるという見解が得られた。

これは8つの次元のすべてに関連していると言ってもよい。「見当識への支援」では心象風景のもたらすもの、「環境における刺激」では身体だけではない心の健康に効果があり、山間部の人は山の景色、農村部の人は田園風景、臨海部の人は海を見れば癒されるという特性がある。これらは前項の信仰・宗教とも関係し、自然の中に「神々」あるいは「スピリチュアルなもの」を見出してきた日本人としての生命感・宇宙感²⁷⁾にも関連している。また「生活の継続性」においては、農村部では野菜作りや保存食づくり、臨海部では釣りや干物づくりが行われているように、生業との関係性も注視すべきである。地方において第一次産業に関わる人々にとっての地域環境は生活の支えと結びつき、共同体の存在は地域ケア環境の面でも重要である。

7. 結論と今後の課題

地域ケア環境・地域環境の要素をPEAPの8次元に当てはめて分析・考察することにより、「慣習」「信仰・宗教」「自然環境」という3つの視点を地域密着型小規模施設の環境づくりにより活かすことが必要であると提案

できた。これらは言い換えれば「地方文化」を活かした環境づくりの重要性が実証できたと言えよう。酒田は「地方文化」とは「生活の流儀、歴史、伝統、習慣、言語、味覚、祭り、自然環境などが総合的に醸し出す、他の地方には模倣できないもの」と定義²⁸⁾しており、上記の3要素を包含するものである。この知見は、熊本県という地方の調査を通して得られたものであるが、柳田などの民俗学の見識²⁹⁾を応用すれば、北から南までの全国の地方に固有の文化が存在し、それらの地方でも汎用できる普遍性をもつものと言えよう。

今後の課題は、研究の位置づけでも述べたとおり、本調査研究による知見を実際の地域密着型小規模施設の環境づくりのマニュアルに活かすことである。そのためには地方で生活する高齢者の視点に立った更なる多角的検討を重ねていきたい。

謝 辞

本研究については「PEAPに基づく施設環境づくり」に関するご指導をいただいた児玉桂子先生、古賀誉章先生、沼田恭子先生に心より感謝いたします。また調査に関しては、日本認知症グループホーム協会熊本県支部の高橋恵子さんをはじめ、ワークショップに参加いただいた介護職員の方々に御礼申し上げます。

注・参考文献

- 1) 例として「認知症高齢者の暮らしとケアの連続性を守るためのとりくみ：リロケーションダメージを最小に」外山義編著、グループホーム読本、ミネルヴァ書房、2000、p.25
- 2) 日本建築学会編、人間—環境系のデザイン、彰国社、1997
- 3) Cohen,U and Weisman,G.D.: Holding On to Home-Designing environments for people with dementia. The Johns Hopkins University Press, 1991
- 4) 岡田威海監訳、浜崎裕子訳、老人性痴呆症のための環境デザイン—症状緩和と介護をたすける生活空間づくりの指針と手法、彰国社、1995
- 5) 同上、p.21
- 6) Weisman,G.D., Lawton,M.P. and Slane,P. D. et al: The Professional Environmental Assessment Protocol. School of Architecture,University of Wisconsin at Milwaukee, 1996
- 7) 児玉研究室+ケアと環境研究会 児玉桂子、痴呆性高齢者への環境支援指針(PEAP日本版3)を用いた施設環境づくり、日本痴呆ケア学会誌 Vol.3, No2, 2004 p.17-26
- 8) 「環境づくり.COM」<http://www.kank-youzukuri.com/>
- 9) 平成15年6月 厚生労働省老健局総務課推計
- 10) 高齢者介護研究会報告、「2015年の高齢者介護」<http://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/kentou/15kourei/2.html>
- 11) 厚生労働省：平成20年度介護給付費実態調査結果の概要 http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kaigo/kyufu/08/kekka_04.html
- 12) おはよう21、中央法規、2004年9月、p.12-33
- 13) 事例報告を集約したものとして以下の2稿を挙げておく
児玉桂子・古賀誉章・沼田恭子他、PEAPにもとづく認知症ケアのための施設環境づくり実践マニュアル、中央法規、2010、p.88-156
児玉桂子編集、認知症ケアを助ける施設環境づくり、地域ケアリング、Vol.11, No.14, 2009、p.6-36
- 14) 日本社会事業大学共同研究プロジェクト「認知症高齢者に配慮した施設環境づく

- り支援プログラムの全国レベルでの普及を目的とした実践研究」および宅老所・グループホーム・施設研究部会
- 15) 児玉桂子編集, 認知症ケアを助ける施設環境づくり, 地域ケアリング Vol.13, No.8, 2011, p.6-40
 - 16) ステップ1: ケアと環境への気づきを高める⇒ステップ2: 環境の課題をとらえて, 目標を定める⇒ステップ3: 環境づくりの計画を立てる⇒ステップ4: 環境づくりを実施する⇒ステップ5: 新しい環境を暮らしとケアに活かす⇒ステップ6: 環境づくりを振り返る
 - 17) 調査対象を熊本県にした根拠は, ①現況調査に欠かせない現場担当リーダーの協力が得られる体制があった. ②熊本県は認知症サポーター等の都道府県人口に占める割合が平成22年, 23年連続して全国第1位(全国平均1.9%に対して熊本県は5.8%)であり, 認知症ケアへの関心が高い県である, が主な理由である.
 - 18) 8次元の内容については, 本文中の表1参照.
 - 19) ひもときシートは認知症ケア高度化推進事業のなかで開発されたもので, アセスメントの視点と焦点を定めていくための前段階の作業と位置付けられている. 事業のサイト: ひもときネット参照
 - 20) 菅野明日美他, 都市部における地域密着型介護サービス施設の地域のかかわりに関する研究, 日本建築学会学術講演梗概集, 2008, p.371
 - 21) 巖爽, 地域に密着したケアネットワークの構築, 地域ケアリング, Vol.13, 2011, p.29-35
 - 22) 絹川麻里他, 入居者の外出行動からみた多階層建物形態にある認知症グループホームのユニット外空間の意味, 日本建築学会学術講演梗概集, 2006, p.323
 - 23) 柴田周二, 生活の思想と福祉社会, ナカニシヤ出版, 2011, p.7
 - 24) 同上, p.60
 - 25) 河合隼雄, これからの日本, ライブラリー潮出版社, 1999, p.12
 - 26) 同上, 25
 - 27) 広井良典, 持続可能な福祉社会, 筑摩書房, 2006, p.235-237
 - 28) 間場寿一編, 地方文化の社会学, 世界思想社, 1998, p.13
 - 29) 同上, p.227 に以下のことが記されている。「柳田は都市では見られなくなった日本の古い習俗が地方に保存されていると考えた. しかも, その地方でさえ, すでになぜ保たれているかは忘れられ, 残っていても, なぜ続けられているかもわからずに昔からやっているだけの慣習が伝えられているという. 多くの場合, 伝承として残されている。」